

研究結果報告書

日本の漢籍資料研究：南方熊楠の漢籍書き込み資料を中心に

所属：清華大学人文学院外文系

役職：准教授

氏名：高 陽

報告者は、日本と東アジアの仏教説話集、特に 12 世紀前半の『今昔物語集』を中心に、南方熊楠の蔵書の書き込みをもとにした比較研究を課題の一つとしている。すでに、「南方熊楠の比較説話をめぐる書き込み—『太平広記』『夷堅志』と『今昔物語集』とのかかわりを中心に—」（『アジア遊学・南方熊楠とアジア』勉誠出版、二〇一一年）などで、『太平広記』や『夷堅志』、『聊齋志異』における書き込みをもとに、『今昔物語集』をはじめとする同類話の分析を行ったが、本プロジェクトではその成果を前提に、『夷堅志』を中心に据えた。

『夷堅志』は南宋の十二世紀後半に成立した大部の説話集（志怪小説）であるが、日本では近年ようやく注目されつつある段階にとどまり、まだ本格的な研究は進展していない。近時、宋代の仏教説話集が関心を集めつつあるが、その動向にも応じて『夷堅志』は注目されるべき大作で、十二世紀前半の『今昔物語集』に匹敵し、相互の比較研究が重要な課題であることを提起した。

まず『夷堅志』における南方熊楠の書き込みの全貌を把握・分析し、第一に熊楠がどのような説話の読み方をしているかを跡付けた。その書き込みは一三〇〇例以上の膨大な量にのぼり、それらをすべて翻刻した上で一覧表にまとめた。それらの内容を本文の語句の抜き出し、説話の概略やモチーフのまとめ、説話に対するコメント等々に大別した上で、個別に代表的な例を取り上げ、詳細に分析した。さらに、その書き込みと熊楠の論考との対応関係を明らかにし、これも一覧表にまとめた。

第二に熊楠の書き込みで指摘されている同類話・関連資料をもとに、『今昔物語集』他の説話本文との比較を試み、それらを通して、日本説話文学会北京特別例会の発表をきっかけに『夷堅志』が東アジアの説話の世界にさまざまに影響を与えていることが分かってきて重要な意義を持つことが明らかになった。

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

題名:南方熊楠と宋代の『夷堅志』—熊楠の書き込みを中心に
発表者名:高陽
会議名:日本説話文学会北京特別例会
日時:2018年11月
場所:中国人民大学

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

題名:南方熊楠と宋代の『夷堅志』—熊楠の書き込みを中心に
発表者名:高陽
論文掲載誌:説話文学研究
掲載時期:入稿済み、2019年9月

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)